広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第62号　2013　115－124

障害者のきょうだいの心理的体験および内的母子・同胞関係の検討

― TAT による無意識的側面の分析 ―

髙　野　恵　代

（2013年10月３日受理）

Study of Psychological Experiences and Inner Mother-Child Relationships and Sibling Relationships in Siblings of Disabled Persons
― Analysis of unconscious aspects using Thematic Apperception Test (TAT) ―

Yasuyo Takano

Abstract: We investigated unconscious aspects of the psychological experiences of siblings of disabled persons by using TAT. The results showed that compared with the control group of college students who had able-bodied brothers and sisters, the siblings of disabled persons easily turned their attention to the internal states of illustrated characters, and expressed greater empathy. Primary circumstances of conflict were family relationships, interpersonal relationships, and identity. Need for external events, interpersonal needs, need for pressure elimination, human pressure, environmental pressure, and internal pressure were displayed. Conflict resolution styles were divided into the following four types: self-resolution, depending on others, unresolved, and conflict avoidance. Internal mother-child relationships and internal sibling relationships were divided into the following four types: receptive, superficial, conflictive, and non-receptive. We compared each type of relationships with conflict resolution styles and conflict circumstances. We found that in both correlations, receptive, superficial, or conflictive types had self-resolution styles.

Key words: Siblings of Disabled Persons, TAT, relationships
キーワード：障害者のきょうだい，TAT，関係性

問題と目的

1981年の国際障害者年制定以降，ノーマライゼーションが障害者福祉の理念として浸透し，社会全体に障害者福祉に対する関心が高まってきた。しかし，障害者とその家族は，家庭で発生する諸問題だけでなく，地域社会との関わりの中でも様々な問題に直面し，心理社会的ストレスを背負わされている（伊藤，1986）。そして，高齢化社会を迎えた今，“障害者の家族は障害者の高齢化と同時に親の高齢化の問題を抱えた二重の介護問題に直面しており，きょうだいの援助的役割が大きくなる”（三原，1998）と指摘されているように，障害者のきょうだい（以下，きょうだいと記述）の存在が注目され始めた。

きょうだいが直面する心理社会的な諸問題や特徴に

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：岡本祐子（主任指導教員），兒玉憲一，杉村和美

ついては，これまでいくつかの報告がなされてきた。たとえば，親が障害者の養育に時間と注意を費やすために，寂しさや不満，孤独，見捨てられ不安を感じ，障害者と親の愛情を奪い合うことに罪悪感を抱きやすく，年下のきょうだいの場合は主観的同胞順位の逆転が起こり，不適応を起こしやすいこと（Lobato, 1983；McHale & Gamble, 1989；Meyer & Vadasy, 1994；宮本，2007），きょうだいの自己犠牲の裏には不満や怒りなどの感情があり（益満・江頭，2002），障害者や親に対する心理的葛藤が生じやすいとされる（Meyer & Vadasy, 1994）。また，障害者の将来的な処遇に関する不安が生じ（吉川，1993），親から過剰な期待を抱かれる（Meyer & Vadasy, 1994）が，親ときょうだいの間ではズレや意識差が生じているという（後藤・村上・森崎・水谷・小谷野・後藤・板倉，1986）。一方で，“人間をよく理解する”，“忍耐強く慈悲深い”など肯定的な影響も述べられている（平川，1986）。

このようにきょうだいの特徴が明らかになってきたが，対象者が乳幼児期から成人期まで幅広く，影響要因の統制が十分でないため，一般化するまでには至っていないのが現状である。さらに，主な研究手法が行動観察や質問紙調査，面接調査であり，意識レベルの調査にとどまっている。しかし，2000年以降になると，心理検査を用いてきょうだいの無意識的側面を捉える試みがなされるようになった。たとえば，中村（2007）は，質問紙とともに動的家族描画法（Kinetic Family Drawings：KFD）を実施し，社会的適応が良好と思われるきょうだいでも，KFD では葛藤や不安が大きいことを示唆した。また，倉田・内藤（2006）は TK 式診断的親子関係検査と YG 性格検査を親ときょうだい双方に対して実施し，統制群と比較した。その結果，きょうだい群から見た親の像は統制群と差はなかったが，両親から見た自己評価では，中間－危険地帯を示した割合はきょうだい群の方が多かったと報告している。このように，心理検査によりきょうだいの一部の無意識的特質が明らかになったが，中村他の研究から，きょうだいは社会的適応が良好であっても無意識的には葛藤や不安などを抱いている，つまり，意識的側面と無意識的側面が異なっていると推察された。このことは，臨床的に重要な視点であり，その差異を明らかにするためにも，無意識的側面を多角的に検討する必要があると考えられた。

そこで，本研究ではきょうだいの無意識的な心理的特徴を検討するために，主題統覚検査（Thematic Apperception Test : 以下 TAT とする）を使用した。TAT は，過去・現在・将来に至る物語から，被検査者のパーソナリティの特徴を掴み，対人関係の側面が検討できる心理検査である。つまり，TAT 物語より，家族，父や母やきょうだい，異性等と自己との関係性，そしてそこから生じる葛藤が汲み取れ，被検査者の人生観，心理的体験を捉えることができる（赤塚，2008）。また，TAT は，“絵画刺激の捉え方，物語の作り方の中に，被検査者自身の内的世界の投影が期待され，心理社会的側面（対人関係）に関する具体的な資料を提供”し，“内在化された人間関係の世界の分析”を行うには，有効な手段でもある（齊藤，1973）。

以上より，本研究では，きょうだいが語る TAT 物語から，①きょうだい群の無意識的な心理的体験が非きょうだい群とどのように性質が異なるのか，②きょうだいの心理的体験の中でも葛藤状態とその内容を明らかにしたうえで，内的母子・同胞関係を類型化し，きょうだいの無意識的な心理的体験について検討することを目的とした。以下，障害のある当事者を同胞と記述する。

方　法

調査対象者

障害者福祉団体の家族会に所属する家族のきょうだいに，筆者が個別に文書で研究の目的と倫理的配慮を説明し，協力者を募集した。同意を得た18名のきょうだい（Handicapped Siblings：以下，HS 群）を対象とした。男性３名，女性15名で，平均年齢は22.78歳（18～32歳），同胞の平均年齢は26.13歳（11～33歳），母親の平均年齢52.53歳（44～60歳）であった（Table １）。統制群は，健常な兄弟姉妹をもつ大学生（Non Handicapped Siblings：以下，NHS 群）19名。男性４名，女性15名で，平均年齢は19.89歳（19～24歳），母親の平均年齢は49.20歳（45～56歳）であった。きょうだい数は，２人が12名，３人が７名，出生順位は，第１子が８名，第２子が８名，第３子が３名であった。なお，NHS 群には，本人および家族や兄弟姉妹に障害をもつ者がいないことを確認している。

手続き

両群ともに個別調査を実施した。調査実施前に，広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の規定に従って，調査への参加は任意であり，調査の途中でも辞退できること，個人が特定されないようプライバシーが保護されることを口頭および文書で説明した。また，調査で得られたデータは外部に漏れないよう管理し，研究結果公表後にデータを消去することも説明したうえで，面接承諾書に同意の捺印署名をしてもらった。調査内容は，IC レコーダーで録音し，逐語記録を作成した。録音を許可しなかった対象者には，

Table 1
調査対象者 HS 群のプロフィール

対象者 No.	きょうだい						母親	同胞			
	性別	年齢	職業	きょうだい数	出生順位	生活形態	年齢	属性	年齢	障害名	生活形態
A	F	20	大学2年	2	2	独居	49	兄	23	脳性麻痺	家族と同居
B	M	18	高校3年	3	3	家族と同居	49	兄	23	脳性麻痺	家族と同居
C	F	23	会社員	3	3	独居	60	兄	29	脳性麻痺	家族と同居
D	F	23	主婦	2	2	独居	51	姉	29	知的障害	家族と同居
E	M	18	高校3年	4	1	家族と同居	44	妹 弟	16 11	脳性麻痺 知的障害	家族と同居
F	F	22	幼稚園教諭	3	1	家族と同居	48	妹	20	脳性麻痺	家族と同居
G	F	21	会社員	5	3	家族と同居	50代	妹	16	脳性麻痺	家族と同居
H	F	21	大学3年	2	1	家族と同居	48	弟	17	脳性麻痺	家族と同居
I	F	26	看護師	2	2	家族と同居	60	兄	32	筋ジストロフィー	家族と同居
J	F	32	看護師	3	2	独居	55	兄	33	ダウン症	家族と同居
K	F	20	公務員	2	2	家族と同居	46	姉	22	脳性麻痺	家族と同居
L	F	21	大学3年	3	1	独居	58	妹	19	知的障害	家族と同居
M	F	24	大学院2年	3	2	独居	55	姉	28	脳器質性障害	家族と同居
N	F	22	大学4年	3	3	家族と同居	56	姉	31	知的障害	家族と同居
O	F	26	団体職員	3	3	家族と同居	56	兄	31	脳性麻痺	家族と同居
P	F	28	ヘルパー	2	1	家族と同居	55	弟	25	ダウン症	家族と同居
Q	F	18	高校3年	2	2	家族と同居	47	兄	23	筋ジストロフィー・自閉症	家族と同居
R	M	27	会社員	3	2	家族と同居	56	兄	31	脳性麻痺	家族と同居

注）Mは男性，Fは女性を示す。

許可を得て，検査中に詳細なメモを取り，それを基に逐語記録的記録を作成した。

TAT 図版はマレー図版を用い，TAT の標準的な方法で筆者が全員に施行した。平均実施時間は，両群とも31分を要した。親子関係と関連付けて語られやすい図版として【図版１】（少年がバイオリンをじっと見つめている。そのバイオリンは彼の前のテーブルの上にある），【図版６BM】（背の低い年長の女性が，背の高い若い男性に背を向けて立っている。男性は当惑した表情をしてうつむいている），【図版７GF】（年長の女性がソファに腰掛け，少女の近くにいる。そして少女に話しかけているか，本を読んであげている。少女は膝の上に人形を抱きかかえ，そっぽを向いている），【図版13B】（少年が丸太小屋の戸口に座っている）を，家族関係を中心とする対人関係を投映しやすい図版として【図版２】（田舎の場面。前面には手に本を持った若い女性。背景では，男性が畑で働いており，年長の女性が傍らで見ている）を選択した。そして，個人の心理的葛藤や将来展望が投映されやすい図版として，【図版３BM】（床の上でカウチにもたれかかり，右腕の上に頭を乗せ，うずくまった形になっている少年（女性）。彼（彼女）のそばの床の上にはピストルがある），【図版14】（明るい窓に向かっている男性（女性）のシルエット。絵の他の部分は全部黒である）を選択し，計７枚の TAT 図版を用いた。

分析方法

分析1：量的分析　目的①のため，鈴木（1997）の各図版の反応分類枠に基づいて，HS 群と NHS 群の反応の着眼点別に出現率を算出し，χ^2検定および Fisher の直接確率法を行った。鈴木の提示した反応分類枠とは，“カードごとに，そのカードで生ずる反応を集積し，集積された膨大な数の反応をそのカードにふさわしい分類枠で分類する”ことを意味する。また，共通に適用できる分析システムがない TAT において，“反応分類によって，そのカードで生ずる可能性のある反応の包括的かつシステマティックな知識が得られる”とした。

本研究では，鈴木（1997）の巻末付録に記載されている“各カードの反応分類表”の“反応カテゴリー”に基づき，得られた語りがどの反応カテゴリーに当てはまるか検討した。たとえば，【図版１】であれば，反応カテゴリーは２つの上位カテゴリーがあり，さらにその下にいくつもの下位カテゴリーに分類され，合計35分類となっている。その各反応カテゴリーの出現率を HS 群と NHS 群で比較した。なお，反応分類表への分類について，HS 群と NHS 群全ての語りを対象に，筆者と臨床心理学を専攻する大学院生２名が独立して評定を行ったところ，一致率は92.3% であっ

た。一致しなかった語りについては，協議のうえ分類した。

分析2：質的分析　目的②のため，HS 群の一人ひとりに対し，HS 群の「体験されている世界」（赤塚，2008）と，HS 群個人の内部にある欲求（need）および外部環境から作用してくる圧力（press）の力動的相互作用について分析と解釈を行い，それらを基に HS 群に顕著な TAT の傾向を質的に明らかにする。そこで，HS 群の対象者ごとに，鈴木（1997）による反応の着眼点および反応カテゴリに沿った分析と，藤田（2001）の情報分析枠，西河（2008）の力動的分析を参考に，分析と解釈を行った。なお，藤田による情報分析枠とは，TAT を“投映法というよりは，問題解決課題とみなし”，“分析と解釈を分けた”分析法である。その際，本研究では，①時間的広がり，②葛藤状態（欲求・圧力の関係），③葛藤の解決型，④内的母子関係，内的同胞関係に着目した。

①時間的広がり：赤塚（2008）より，過去，現在，将来の欠落はないか，その叙述量はどの程度か，時間的一貫性や流れはあるか，時間的スパンはどの程度かを分析した。

②葛藤状態（欲求・圧力の関係）：安香・坪内（1968）は，反応内容を扱うに当たり，“最も正統的な技法はいうまでもなく欲求・圧力分析（Need-Press analysis）であろう”と述べている。欲求・圧力分析は，TAT の創始者である Murray らによって作成，発展されてきた。欲求は，主人公の意思や願望，行動であり，圧力は，主人公が外界から受ける全般作用である。そこで，対象者ごとに，Murray らの詳細な分類に囚われることなく，物語の中に表れている主人公の欲求と圧力は何かを分析した。なお，本研究では，欲求と圧力の関係で捉えられる状態を葛藤状態とした。対象者ごとに欲求と圧力の関係を分析した後，全ての対象者を総合して，きょうだいの欲求と圧力の関係について検討した。

③葛藤の解決方法の類型：対象者ごとに，葛藤がどのように解決されているかに着目し，主人公の葛藤解決の取り組み方について分析した。その後，全ての対象者を総合して，取り組み方の類型化を行った。HS 群全ての語りを対象に，筆者と臨床心理学を専攻する大学院生１名が独立して評定を行ったところ，一致率は 83.3% であった。

④内的母子関係・内的同胞関係の類型：対象者ごとに，物語の系列的な流れから内的母子関係および内的同胞関係を分析した。系列分析で不確定な場合は，図版のテーマという視点より，内的母子関係では，図版１，２，6BM，7GF から判断した。内的同胞関係では，図版7GF から判断した。その後，全ての対象者を総合して関係性の類型化を行ったところ，内的母子関係の評定者一致率は83.3%，内的同胞関係の評定者一致率は77.8% であった。なお，③，④について，一致しなかった対象者については，協議の上，類型を決定した。

結果と考察

分析１　HS 群と NHS 群の比較

結果，計10項目において有意差および有意傾向が見られた（Table ２）。この結果から，各図版の反応の着眼点において，両群に以下の違いが認められた。

【図版1】　バイオリンを認知し，物語を取りこんでいるもの（Ⅰ）は，HS 群 n=13(72.2%)，NHS 群 n=18 (94.7%，$\chi^2(1, N=37)=3.45, p<.10$）であり，バイオリンを認知していないものや認知しているが物語に取り込んでいないもの（Ⅱ）は，HS 群 n= 5 (27.8%)，NHS 群 n= 1 (5.3%) であった（$\chi^2(1, N=37)=3.45, p<.10$）。この結果から，HS 群は NHS 群よりバイオリンを認知しない傾向が示された。鈴木（1997）は，バイオリンの非認知には，“バイオリンに全く注意を払っていないかのような様態と，バイオリンに十分注意を払いつつ正しく同定しえない様態”の２つがあるという（以下，分析１の“　”は鈴木（1997）による）。そして，バイオリンの非認知には，“ある特定の観念やコンプレックスに心を占拠されてしまっているために，知覚の疎漏”が生じるためと指摘している。結果から，２つの様態を分けることはできないが，HS 群は NHS 群よりも，“ある特定の観念やコンプレックスに心を占拠されて”いる傾向があると考えられた。また，少年に悩みや悲しみや不安を見ているもの（Ⅱ－ⅰ）は，HS 群 n= 5 (27.8%)，NHS 群 n= 1 (5.3%) であった（$\chi^2(1, N=37)=3.45, p<.10$）。よって，HS 群の方が NHS 群よりも，少年に悩みや悲しみや不安といった，少年の内的状態を捉える傾向が示された。

【図版2】　前景の女性は家業の大変さや家の貧しさを自ら察して悩むとするもの（Ⅲ–ⅱ–1–A–b）は，HS 群 n= 0 (0.0%)，NHS 群 n= 5 (26.3%) であった（$\chi^2(1, N=37)=5.48, p<.05$）。NHS 群が HS 群よりも，前景女性の学問的志向が後景の農業のせいで達成されないと捉え，“自己の良心の抵抗”という，障害がより内的な性質のものとすることが有意に高いと示された。

【図版3BM】　画中の人物に悲嘆，苦悩を見ているもの（Ⅰ）は，HS 群 n=14(77.8%)，NHS 群 n= 9 (47.4%) で，HS 群が NHS 群よりも有意に高いことが示され

Table 2
χ^2検定（Fisher の直接確率法）で有意差・有意傾向が見られた項目

図版	鈴木(1997)の反応分類枠による有意差・有意傾向がみられた項目	値	自由度	残差分析
1	Ⅰ：バイオリンを認知し，物語に取りこんでいるもの	3.45†	1	HS群＜NHS群
	Ⅱ：バイオリンを認知していないものや認知しているが物語に取り込んでいないもの	3.45†	1	HS群＞NHS群
	Ⅱ-ⅰ：少年に悩みや悲しみや不安を見ているもの	3.45†	1	HS群＞NHS群
2	Ⅲ-ⅱ-1-A-b：前景の女性は家業の大変さや家の貧しさを自ら察して悩むとするもの	5.48*	1	HS群＜NHS群
3BM	Ⅰ：画中の人物に悲嘆・苦悩を見ているもの	3.63*	1	HS群＞NHS群
	Ⅰ-ⅴ：ⅰ～ⅳ以外（ⅰ：大切な人との関係の破綻や消滅あるいはその恐れが原因となっているもの，ⅱ：自分自身の行為の後悔や自己の能力に対する悲観・絶望，ⅲ：持続的な過酷な生の条件が原因であるもの，ⅳ：寂しさ・虚しさ・張りのなさ）	3.63*	1	HS群＞NHS群
6BM	Ⅰ：相手が容易に受け容れ難い意思の表明を，一方が他方にしているとするもの	3.28†	1	HS群＜NHS群
13B	Ⅲ-ⅳ：何らかの行動のひとコマ（かくれんぼ，物を食べている等）	9.75**	1	HS群＜NHS群
14	Ⅰ-ⅱ：心理的次元ないし象徴的次元での脱出が問題になっているもの	3.63†	1	HS群＞NHS群
	Ⅲ-ⅳ：ただ外（空，景色）を見ている，外（空，景色）を見て考え事をしている，外に出て行く，などとするもの	5.48*	1	HS群＜NHS群

注）HS群：n=18　NHS群：n=19　　(**p <.01, *p <.05, †p <.10)

た（χ^2(1, N=37)=3.63, p<.05）。また，（Ⅰ）の下位項目における悲嘆や苦悩の原因を，特殊なものとしたり，１つに決定しなかった（Ⅰ－ⅴ）のは，HS 群 n= 5（27.8%），NHS 群 n= 1（5.3%）で，HS 群が NHS 群よりも有意に高いことが示された（χ^2(1, N=37)=3.63, p<.05）。

【図版6BM】 相手が容易に受け容れ難い意思の表明を，一方（若い男性 / 年配の女性）が他方（年配の女性 / 若い男性）にしているとするもの（Ⅰ）は，HS 群 n= 8（44.4%），NHS 群 n=14(73.7%) で，NHS 群が HS 群よりも有意に高い傾向が示された（χ^2(1, N=37)=3.28, p<.10）。この図版は“２人の対峙・対決の様相”と捉えやすいことから，NHS 群は HS 群よりも，二者関係の“対峙・対決”を意識する傾向があると推察された。

【図版7GF】 有意差，有意傾向が見られた項目はなかった。

【図版13B】 何らかの行動のひとコマ（“かくれんぼ”，“物を食べている”）とするもの（Ⅲ－ⅳ）は，HS 群 n= 5（27.8%），NHS 群 n=15(78.9%)で，NHS 群が HS 群よりも有意に高いことが示された（χ^2(1, N=37)= 9.75, p<.01）。よって，NHS 群は少年の行動に，HS 群は少年の内面に注目しやすいと考えられた。

【図版14】 現在の状況からの脱出が顕在的・潜在的に問題になっているとみなされるもの（Ⅰ），つまり，男性（女性）が窓から脱出する，もしくは脱出の願望をもっているとする下位項目で，心理的次元ないし象徴的次元での脱出が問題になっているもの（Ⅱ－ⅱ）は，HS 群 n= 8（44.4%），NHS 群 n= 3（15.8%）で，HS 群が NHS 群よりも有意に高い傾向が示された（χ^2(1, N=37)=3.63, p<.10）。また，ただ外（空，景色）を見ている，外を見て考え事をしている，外に出て行く等とするもの（Ⅲ－ⅳ）は，HS 群 n= 0（0.0%），NHS 群 n= 5（26.3%）で，NHS 群が HS 群よりも有意に高いことが示された（χ^2(1, N=37)=5.48, p<.05）。“心理的ないし象徴的次元での脱出を読み取るには，少なくとも一定水準以上の観念的発達と内面性の発達を必要”とされることから，HS 群は NHS 群よりも内面性や精神性の発達レベルが高いと考えられた。ただし，“心理的ないし象徴的次元での脱出”は，何らかの原因で心理的閉塞，抑うつ状態にある人物のその状態からの脱却をテーマ”としているため，背後にはこうした“心理的閉塞や抑うつ状態”に陥りやすい問題があることが考えられた。

分析２　HS 群における内的関係性の違いによる物語の特徴

結果，①時間的広がり，②葛藤状態（欲求・圧力の関係），③葛藤の解決方法の類型，④内的母子関係・内的同胞関係の類型について，それぞれ以下のような TAT 分析結果の特徴が見出された。

①時間的広がり 【図版７GF】で，「彼女に弟ができたんですけど，どうしても母親をとられるっていう不安があって，きちんと弟に接することができない。過去や将来に関してはちょっと難しい」（対象者 D）という語りのように，過去あるいは将来が欠落している者，時間的広がりが乏しい者が見られた（A，C，D，I，L，N，O）。これは，赤塚（2008）と藤田（2001），西川（2008）の解釈理論によると，時間的展望の持ちにくさや解決プロセスの具現化の難しさ，過去を振り返ることの恐

怖や不安といった否定的要素が影響していると考えられた。平川（1986）によると，きょうだいは，同胞との関係を否定的に捉え，あるいは同胞と関わったことで生じた否定的な体験が生じやすいと指摘している。TAT 物語においても，こうしたきょうだいの背景にある問題が影響している可能性が推察された。

さらに，将来展望の持ちにくさについて，橘・島田（1999）と吉川（1993）は，同胞の将来的な処遇と自己の将来という具体的な問題を見据えた時に不安が表出するとした。また，将来の問題に関して，親の多くは“きょうだいには同胞のことを気にすることなく，自由に将来を選択してほしい”という思いを抱いているが，きょうだいはそのように捉えておらず，お互いを思いやった気持ちがズレとなっている（後藤他，1986；矢矧・中田・水野，2005）。そのため，青年期にある対象者にとっては，将来のことを現実的な問題として意識し始めるため（吉川，1993），意識的な葛藤が生じやすいと考えられる。TAT 物語において将来が欠落する，もしくは時間的広がりが乏しいという指標が，不安の強さといった否定的要素が影響するのであれば（赤塚，2008；藤田，2001；西河，2008），それらの意識的葛藤を抑圧するがゆえに将来展望の欠如が生じると考えられ，きょうだいにとって無意識的部分に占める葛藤も大きいと推察された。

②葛藤状態（欲求・圧力の関係）　家族関係の葛藤，対人関係の葛藤，アイデンティティの葛藤が主な葛藤状態であることが明らかになった。欲求は，外的事象への欲求，対人欲求，圧力排除の欲求に，圧力は，人的圧力，環境圧力，内的圧力に分けられた（Table 3）。

たとえば，【図版14】で，「男性の今の心の状況を表している。真っ暗な所なので，心がすごいいろんなことで悩んでて。窓を開けると明るいので，次のステップへ踏み出したい。こうやって光を見つけられたのできっと明るい未来がある」（O）と語られた。この語りを欲求と圧力の観点から分析すると，きょうだいは，外界からの影響を受けずに主体性を発揮して状況の変化を求め，他者（主に家族，母親）と相互的に関わりたいと望む。しかし，それに対し，環境という大きな枠組みや，家族や親に縛られること，逃れられない運命という外界からの作用を受けて無力感を抱き，避けることのできない死の切迫感をも抱くことで，葛藤が生じると考えられた。それは，きょうだいの家庭環境

Table 3
葛藤状態と欲求・圧力の類型

分類		特徴	物語の例（自由反応段階）
葛藤状態	家族関係の葛藤	家族関係から生じる葛藤。 (A,B,D,E,F,H,I,K,M,P,Q,R)	【13B】男の子は，暗い家の中に住んでます。とても寂しくて，誰か遊び相手が欲しいと思ってる。たぶん，可愛い犬が来て，この子と仲良くなるわんちゃんが現れます。この子は，犬が大好きになって，家の中の雰囲気が暗くても，犬に癒されて，だんだん心があったかくなります。この犬から愛情をもらっていい子に育っていきます。きっと，立派な人になるでしょう。(K)
	対人関係の葛藤	他者関係から生じる葛藤。 (C,N,L,O)	【13B】今彼の目の前には友達がいっぱい遊んでて，一緒に遊ぼうよって言われてるんですけど，ちょっと今機嫌が悪くて，意地を張ってて，ヤダって言ってるところじゃないかと。時間が経ったら，きっと機嫌を直して一緒に遊びに行くんじゃないかと思います。(L)
	アイデンティティの葛藤	自己のアイデンティティに関する事象や，それにまつわる葛藤。 (G,J)	【2】この人はすごいいいとこのお譲さんで。ずっとすごい箱入り娘で育てられてきたけど，すごい窮屈に感じて家を飛び出して。いろんな暮らしを見て，今カルチャーショックを受けてるところです。将来はいろんなとこを旅しながら，自伝じゃない，旅の記録とかで本を出していく人になると思います。(G)
欲求	外的事象への欲求	外的事象や葛藤状態に対して，克服・乗り越えたいとする欲求。達成欲求や変化欲求。 (A,B,C,G,H,I,K,M,N,R)	【1】彼はバイオリンを弾きたいんですけど，弾くことができない。それは，耳に障害があるから音が聴こえない。それでも，将来的には弾けるようになって，世界で名だたる有名な人になるんじゃないかな。(C)
	対人欲求	他者（家族を含む）に対して相互交流を期待する欲求。親和欲求。 (A,E,F,I,K,L,N,O,P,Q,R)	【6BM】男性が女性に，自分の思ってることを話したいけど，なかなか話しかけられない。話したいことは，将来や未来のこと。男性は，未来のことで悩みごとがある。過去にはじっと悩みがあって，現在まで持ってきてて，今それを話そうとしてる。(I)
	圧力排除の欲求	外的圧力を排除しようとする欲求。自主独立欲求。 (D,L,M,Q)	【14】暗闇から外に出て行く。ずっと暗い所に，窓が1個しかない暗い部屋にいて。でも，外ってどうなんだろう。窓開けて出てくぞ！出たら明るくて。でも，外は怖い。だけど，楽しそう。(Q)
圧力	人的圧力	他者（家族を含む）との交流から生じる圧力。被支配的圧力。(A,D,H,M,N,O,P)	【13B】寂しそうな感じですね。将来も，愛を受けずに育っていくんじゃないですかね。過去は，親の虐待ですかね？(D)
	環境圧力	外界からもたらされるもの（物理的環境を含む）で，主人公にはどうにもできない圧力。運命・不幸圧力。 (A,B,C,E,F,G,H,I,K,M,O,P,Q,R)	【6BM】誰かのお葬式で，奥さんというかお母さんは茫然としてる。息子が使者を悼んでるポーズで。しばらくの間は暗いまんま。お母さんがちょっと立ち直れないかな。2人とも暗い感じ。(Q)
	内的圧力	自己の中から生じる圧力。生死を揺さぶるような死の圧力。 (B,C,D,G)	【3BM】家族が死んでしまって，死のうと思った。死のうと思ったんですけど，死にきれなくて，これからどうやって生きていけばよいのかわからなくて，突っ伏してる感じです。(B)

注）（　）内は該当する対象者を示す。

Table 4
葛藤の解決方法に関する分類の特徴

葛藤類型	対象者	特徴	例(図版1)
自己解決型	n=10 (A,B,G,J,K,L,M,P,Q,R)	葛藤を自己に定位して，自己の能力で解決に導こうと主体的に取り組み，何らかの展開や変化をもたらそうとする。	男の子は家にいて，バイオリンの練習をしているんだけど，ちょっと難しいところがあって，迷っていて。弾き方を迷っていて。で，この考えた結果，またバイオリンの練習をし始めます。(A)
他者依存型	n=2 (C,N)	葛藤を自己の能力で解決しようとせず，他者に依存しようとしたり，環境に任せたままにする。	バイオリンの柄が壊れてしまい，音楽室で悩んでいる。すごく音楽が好きで，これまで一生懸命やってきたけど，お金もないしどうしようと悩んでる。将来は友達からバイオリンをもらいにいく。(N)
未解決型	n=2 (H,O)	葛藤を自己の能力で解決しようとせず，外部の圧力に服従する。解決しても主人公の意思や希望に反するもの。	家族とかがいなくて，1人で悩みを抱えて生きてきた。未来もなく，結婚もせずにそのままでいる。(H)
葛藤回避型	n=4 (D,E,F,I)	自由反応段階で葛藤が収束しない。または曖昧なままで，解決プロセス自体も漠然としている。図版とはかけ離れた物語になることもある。	考え込んでる。未来のために何か一生懸命やろうとしてる。(I)

注)( )内は該当する対象者を示す。

を推察すると，家族の多くは同胞を中心に動いているために，きょうだいは家族内では親に迷惑をかけないように気を使いながらよい子として過ごしたり(宮本，2007)，家庭状況についての不満や怒りが生じたりする（益満・江頭，2002)。しかし，益満・江頭（2002）によると，きょうだいは，そうした否定的感情を表出することに強い抵抗感を持ち，さらに，そうした感情をもつこと自体に強い罪悪感を抱くという。このことから，きょうだいは否定的感情を抑圧する体験が継続していると思われ，無意識レベルでは，否定的感情の開放を求める葛藤状態が生じていると推察された。

相互的交流を望むという点では，たとえば，【図版13B】で，「男の子は暗い家の中に住んでます。とても寂しくて，誰か遊び相手が欲しい。かわいい犬が来て（中略）男の子は犬が大好きになって，家の中の雰囲気が暗くても犬に癒されて，だんだん心があったかくなります。犬から愛情もらって，いい子に育っていきます」(K）という語りのように，きょうだいは母親を始めとする家族との交流に無意識的に希薄さを感じ，さらに他者とも深い関係性を築きにくい面があることが推察された。なお，死の切迫感とは，同胞の死あるいは母親の死を象徴していることが示唆された。たとえば,【図版３BM】で,「母親が同胞の死を悲しみ，母親も後を追おうとしている」(E）と，自己の置かれた環境を投映したように，障害の程度が重いきょうだいにとっては，死は隣合わせの次元であると考えられ，無意識レベルで恐怖や不安を抱いていると思われた。

なお，橘・島田（1998）が，“きょうだいは多くの場面，特に人生の岐路において，自分と同胞との間で葛藤状態にある”と指摘したように，青年期のきょうだいは人生の岐路という節目において，一般青年が経験するアイデンティティ葛藤に加え，“二重の介護問題”（三原，1998）を自己に関連付ける時に，漠然とした不安が生じると思われた。たとえば,【図版２】で，「この人はすごいいいとこのお嬢さんで。ずっと箱入り娘で育てられたけど，すごい窮屈に感じて家を飛び出して。で，いろんな暮らしを見て，今カルチャーショックを受けているところです。将来は，いろんなとこ旅しながら，自伝や旅の記録とかで本を出していく人になると思います」(D）と，現在置かれている環境からの解放というテーマが TAT 物語で示された。Kroger（2000　榎本　2005）は，一般青年が体験する家族内葛藤は，自分自身の関心や考えを主張し，家族の中でより対等な役割を獲得しようとする時に生じることが多いとしたが，きょうだいは一般青年とは異なる家族内葛藤を体験していると考えられた。

③葛藤の解決方法の類型　自己解決型（n=10)，他者依存型（n=２)，未解決型（n=２)，葛藤回避型（n=４）の４類型に分類された（Table ４)。

自己解決型は，葛藤要因が漠然とせず解決プロセスが具体的でなくても，どんなに欲求が強くても，自己解決しようとする姿勢がある。現実検討力が備わり，外界に対する構えができていると思われた。他者依存型は，他者に依存して葛藤を解決することで，自己の安心感を守っていると考えられた。また，感情の抑圧が見られ，現実的側面を重視することで，葛藤を和らげていることが推察された。未解決型は，情緒的刺激や内的体験に深く関わることが苦手なため，自己解決することは困難と窺われた。そのため，自己を抑制し，外界の圧力に服従することで，葛藤を解決しようとすることが推察された。この型は，自我が脆弱であり，体験を自己に定位することが困難であると考えられた。葛藤回避型は，情緒的刺激に敏感で適切な距離が保ちにくく，内的体験に目が向きやすい傾向がある。そのため，葛藤状態を収束させず，あるいは曖昧なままにすることで，脆弱な面を保っている側面がある。それにより，一見葛藤が解消されたように思われるが，葛藤回避型ほど欲求は大きいため，葛藤は一貫して存在し続けていることが推察された。

Table 5
母親と同胞に対する内的関係性の分類とその特徴

関係性の類型	母親との内的関係性	同胞との内的関係性	特　徴	例；母子関係
受容的関係	n=5 (E,F,J,Q,S)	n=4 (E,J,K,S)	母親あるいは同胞との関係を，内的に良好だと捉え，受容的・相互的に関わる関係。積極的に関わりたい，愛されたいという情緒的交流もある。	【6BM】2人は親子。息子は仕事のために，一緒に出かける予定だった母親に申し訳ないと話している。息子はこの先，仕事と親の介護を頑張りながら，家族を支えていく。(F)
表面的関係	n=4 (A,C,G,N)	n=6 (A,F,G,L,N,Q)	母親あるいは同胞との関係を，内的に良好でも否定的でもなく，一定の距離をとって，表面的に関わる関係。主体的に関わろうとはしない。	【7GF】2人は親子で，泣いてる赤ちゃんは女の子のきょうだいで，家族3人で楽しく話してる場面。(A)
葛藤的関係	n=5 (B,H,K,L,M)	n=5 (B,C,I,M,P)	母親あるいは同胞との関係をもつ時，内的に葛藤状態が生まれる関係。両価的な感情が投映される。	【6BM】夫婦で，女の人は外を見てて。未来を見てる感じ。離婚寸前で。女の人は離婚したくて，外を見てるんで，明るい未来を作りたいなと思っていて。男の人は下を向いてるんで，離婚したくない。残念っていうか，暗い気持ちを表してると思う。(B)
非受容的関係	n=4 (D,I,O,P)	n=3 (D,H,O)	母親あるいは同胞との関係を，内的に否定的に捉え，非受容感や被支配感，あるいは拒絶したいと望みながらと関わる関係。回避しようとしたり攻撃的な感情が投映される。	【7GF】親の愛情が子どもには届いていない感じですね。将来はたぶん，人の話を聞かない女の子になるんじゃないですかね。過去はたぶん，素直な子だったんじゃないですかね。(D)

注)(　)内は該当する対象者を示す。

Table 6
内的母子関係と内的同胞関係別からみた葛藤解決型および欲求圧力の特徴

同胞との内的関係性	母親との内的関係性			
	受容的関係	表面的関係	葛藤的関係	非受容的関係
受容的関係	E(回；対/環)，J(自；外・対/人・内)，S(自；外・対/環)		K(自；外・人/環・人)	
表面的関係	F(回；対/環)，G(自；外/環・内)，Q(自；外・対/環)	A(自；外・対/人・環)，N(他；外・対/人)	L(自；対・圧/内)	
葛藤的関係		C(自；圧/環・人)	B(自；外/環・内)，M(自；外・圧/環・人)	I(回；外・対/環)，O(未；対/環・人)，P(自；対/環・人)
非受容的関係			H(未；外/環)	D(回；圧/環・人)

注1) アルファベットは該当する対象者を示す。
注2) 葛藤解決型；主な葛藤状態（欲求/圧力）
注3) (自)：自己解決型，(他)：他者依存型，(未)：未解決型，(回)：葛藤回避型
注4) 外：外的事象への欲求，圧：圧力排除の欲求，対：対人欲求，人：人的圧力，環：環境圧力，内：内的圧力

以上より，葛藤の解決型は，無意識的な葛藤をどのように自己に定位し収束させていくかという葛藤に対する自我の強さを表していると考えられた。その一方で，親の大変さを理解しているために，悩みや不安を抱えていても自分から親には悩みを打ち明けられない（宮本，2007）という独特な家庭環境から培った葛藤の対処法が表されたとも考えられた。ただし，NHS群の類型化を行っていないため，これらの特徴は，必ずしもHS群の特徴的な類型とはいえない。

④内的母子関係と内的同胞関係の類型および関係性別による葛藤状態と解決型の特徴　内的母子関係，内的同胞関係ともに，受容的関係，表面的関係，葛藤的関係，非受容的関係の４つのタイプに分類された（Table 5）。なお，内的母子関係と内的同胞関係は対象者内で必ずしも一致していなかった。

関係性別に，葛藤状態と解決型の特徴を検討した結果（Table 6），内的母子関係，内的同胞関係ともに非受容的関係である者（n= 2）は葛藤回避型に，そのどちらかが非受容的関係であるきょうだい（n= 6）は，葛藤回避型（50%），未解決型（33.3%），自己解決型（16.7%）となった。その他の関係性では，両関係ともに受容的関係，表面的関係，葛藤的関係の９つのカテゴリーの中では大きな差は見られず（n=10），76.9%が自己解決型を示した。このことから，母親や同胞に対して否定的もしくは攻撃的な感情が投映される非受容的関係では，葛藤を主体的に解決することが難しく，葛藤的関係以上であれば，主体的に葛藤を解決することが可能であると推察された。ただし，NHS群の類型化を行っていないため，これらの特徴は，必ずしもHS群の特徴的な類型とはいえない。

まとめ

本研究の目的は，TAT物語により，きょうだい群の無意識的な心理的体験を検討することであった。分析１と分析２から，以下の特徴が見出された。

分析１：量的分析から得られた結果

分析１では，きょうだい群の無意識な心理的体験が

非きょうだい群とどのように性質が異なるのかを検討した。結果から，HS 群は NHS 群よりも図版の人物の内的状態に目が向きやすく，共感性が高いことが示された。特に，その内的状態が悩みや悲しみ，苦悩といった否定的なものほど共感しやすいことが明らかになった。平川（1986）によると，きょうだいは同胞とともに成長する中で，“人間をよく理解する”，“忍耐強く慈悲深く辛抱強い”といった肯定的影響を受けると指摘した。また，益満・江頭（2002）は，きょうだいは親の苦しみを感じ取っているとしたが，HS 群の特徴は，これらの先行研究で指摘されていることを無意識レベルにおいても支持したといえる。

また，【図版14】から，HS 群は NHS 群よりも内面性や精神性の発達レベルが高いことが示されたが，その背後には，鈴木（1997）の理論によると，“心理的閉塞や抑うつ状態”に陥りやすい問題があるという。このことは，後述する対象者の成熟度も影響しているとも考えられるが，きょうだいは不安や葛藤にかられる側面があること（平川，1986），否定的感情を表出しにくいこと（益満・江頭，2002）を支持したと考えられた。

分析２：質的分析から得られた結果

分析２では，きょうだい群の葛藤状態とその内容を明らかにし，内的母子・同胞関係を類型化し，きょうだいの無意識的な心理的体験について検討した。

まず，きょうだいは，恐怖や不安といった否定的要素影響から，時間的展望がもちにくいことが示唆された（赤塚，2008；藤田，2001；西河，2008）。これは，同胞の将来的処遇を見据えた時に不安が表出されること（橘・島田，1999；吉川，1993）が影響していると推察された。

これまで，きょうだいの心理社会的な諸問題や特徴についてはいくつか明らかにされてきたが（Lobato, 1983他），TAT 物語から，無意識的レベルにおいても葛藤状態が明らかになった。きょうだいの葛藤状態は，家族関係，対人関係，アイデンティティの葛藤が見出された。欲求は，外的事象への欲求，対人欲求，圧力排除の欲求に，圧力は，人的圧力，環境圧力，内的圧力に分類された。図版に投映されたように，きょうだいは自己よりも環境を優先してしまうため，家族に縛られているという葛藤があるが，主体性を発揮したいと望んでいることが推察された。よって，葛藤状態には，きょうだいの家庭状況の特殊性と（吉川，1993），それに伴う感情表出の問題（益満・江頭，2002）が影響していると考えられた。なお，橘・島田（1999）は，特に人生の岐路において葛藤状態を起こしやすいとしたが，TAT 物語からは葛藤状態が引き起こされる要因について検討できなかったため，今後の課題とする。

葛藤の解決型は，自己解決型，他者依存型，未解決型，葛藤回避型に分類された。また，関係性においては，内的母子・同胞関係ともに，受容的関係，表面的関係，葛藤的関係，非受容的関係の４類型に分類された。関係性の視点からは，内的母子関係，内的同胞関係ともに非受容的関係であると，葛藤を主体的に解決することが難しいが，葛藤的関係以上であれば，主体的に葛藤を解決していくことが可能と推察された。なお，TAT に投映される人間関係の側面とは，現実の人間関係ではなく，あくまで内的な世界が示される（鈴木，1997）。伊藤（1994）が，“葛藤や悩みを解決するには，他者との調和や共存を大切にし，それに支えられることがより重要である”と述べているように，葛藤を主体的に解決するためには，内的世界において両価的以上の関係性によって支えられる必要があると考えられた。それはきょうだいにとって，過去から現在までになるべく良好な内的母子関係，内的同胞関係を構築することが，将来に繋がる基盤となると思われる。

以上をふまえ，TAT 物語は，“絵画刺激の捉え方，物語の作り方の中に，被験者自身の内的世界の投影が期待され，心理社会的側面（対人関係）に関する具体的な資料を提供”し，“内在化された人間関係の世界の分析”を行うには有効な方法である（齊藤，1973）。TAT 物語により，きょうだいは時間的連続性の中で，個人によって異なる関係性を育み，葛藤に対処していること，そして葛藤解決の方法により，将来展望の捉え方が示されることが窺われた。

今後の課題

本研究では，無意識的な心理的体験を検討するために TAT を用いたが，目的②をより詳細に検討するためには，NHS 群の分析解釈を行い，HS 群と比較する必要がある。また，対象者を増やして結果の信頼性，妥当性を検討し，関係性や葛藤の質についてより精緻化することが求められる。なお，葛藤状態との関連では特徴的なことが示唆されなかった。これは，きょうだいが抱える葛藤のテーマが様々であり，大きな枠組みで捉えることの限界があると考えられた。なお，HS 群の方が NHS 群よりも内面性や精神性の発達レベルが高い示唆されたが，両群の年齢をマン・ホイットニーの U 検定によって比較した結果，HS 群の方が NHS 群よりも有意に年齢が高かったため（U=86.00, p=.0086），被検者の成熟度が質的に異なっている可能性も考慮する必要がある。このように，両群の年齢が一致していないのは本研究の限界であり，今後は対象者を増やして，両群の年齢幅を統一する必要がある。

最後に，きょうだいに影響を及ぼす要因として，障害名，障害の程度といった“障害の要因”と，出生順位，性別といった“きょうだいの要因”，社会経済的地位，親の同胞の受容度といった“家族の要因”（平川，1986；三原，1998；Simensson & McHale，1981他）が挙げられる。“障害の要因”において，本研究では，脳性麻痺を中心とする障害の程度が重度のきょうだいを対象とした。一方，発達障害のように，診断確定が遅く，一見しただけでは障害と分かりにくく周囲の理解を得られにくい障害（浅井・杉山・小石・東・並木・海野，2004）とでは，きょうだいの心理的体験は異なると考えられる。“障害の要因”によってきょうだいの心理的体験が異なることを明らかにするためには，障害の種別と程度を統制し，同じ条件下でTATを実施，比較検討することが有益と考えられる。

【引用文献】

赤塚大樹（2008）．TAT解釈論入門講義　培風館

安香　宏・坪内順子（1968）．TATの分析法と解釈基準の検討－刺激認知と物語構成の特徴からみた－　臨床心理学研究，**7**，1-14.

浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二・東　誠・並木典子・海野千畝子（2004）．軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討　児童青年精神医学とその近接領域，**45**，360-371.

藤田宗和（2001）．TATの情報分析枠（The Frame of Information Analysis）の提案－TATトコル分析のための新しい枠組み－　犯罪心理学研究，**39**，1-16.

平川忠敏（1986）．障害児の同胞　幼年教育研究年報，**11**，65-72.

伊藤きよ子（1986）．障害者をもつ家族の意識と態度に関する心理学的研究　東海学園大学，**21**，13-31.

伊藤美奈子（1994）．欲求と葛藤解決から見た自他関係についての一考察　心理臨床学研究，**12**，73-79.

後藤秀爾・村上英治・森崎康宣・水谷　真・小谷野裕美・後藤由美子・板倉由未子（1986）．重度・重複障害児の集団療育（９）－健常児きょうだいと家族力動－　名古屋大学教育学部紀要，**33**，315-326. 紀要，**21**，13-31.

倉田さつき・内藤弥生（2006）．障害児をきょうだいにもつ子どもの親子関係に関する検討　島根医学，**26**，37-41.

Kroger, J. E. (1966). Identity development：Adolescence through adulthood. Thousand Oaks, CA：Sage. pp25-47.（クローガー，J.　榎本博明（訳）（2005）．アイデンティティの発達－青年期から成人期－　北大路書房）

Lobato, D. J. (1983). Siblings of handicapped children：A review. *Journal of Autism and Developmental Disoreders*, **13**, 347-364.

益満成美・江頭幸晴（2002）．障害児のきょうだいにおける否定的感情表出の困難さについて　鹿児島大学法文学部人文科学論集，**55**，1-13.

McHale, S. M. & Gamble, W. C. (1989). Sibling relation-ships of children with disabled and nondisabled brothers and sisters. *Developmental Psychology*, **25**, 421-429.

Meyer, D. J. & Vadasy, P. F (1994). *Sibshops：Workshops for siblings of children with special needs*. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.

三原博光（1998）．知的障害者の兄弟姉妹の生活体験について－幼少期の体験や両親とのかかわりなどを中心に－　発達障害研究，**20**，72-78.

宮本知香（2007）．障がい児・者のきょうだいの心理的変化と課題　立正大学福祉研究，**9**，53-62.

中村　剛（2007）．障害児・者のきょうだいが同胞にいだく心理的特性に関する研究　山口大学心理臨床研究，**7**，11-21.

西河正行（2008）．Thematic Apperception Test（主題統覚検査）の力動的理解について　大妻女子大学人間科学部紀要，**10**，95-124.

齊藤久美子（1973）．TAT 倉石精一（編）臨床心理学実習－心理検査法と治療技法－　誠信書房

Simensson, R. & McHale, S. M. (1981). Research on handicapped children：Sibling relationships. *Child Care, Health & Development*, **7**, 153-171.

鈴木睦夫（1997）．TATの世界－物語分析の実際－　誠信書房

橘　英彌・島田有規（1999）．障害児者のきょうだいに関する一考察（２）－新しい教育・社会資源としての観点から－　和歌山大学教育学部紀要，**49**，67-81.

矢矧陽子・中田洋二郎・水野　薫（2005）．障害児・者のきょうだいに関する一考察－障害児・者の家族の実態ときょうだいの意識の変容に焦点を当てて－　福島大学教育実践研究紀要，**48**，9-16.

吉川かおり（1993）．発達障害者のきょうだい意識－親亡き後の発達障害者の生活と，きょうだいの抱える問題について－　発達障害研究，**14**，253-263.